
SS4__紅蓮の絆

マジチョコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SS4 | 紅蓮の絆

【Nコード】

N7463Y

【作者名】

マジチヨロ

【あらすじ】

平穏な時に笑い合うグレン達。

共に過ごした日々の果てにある、二人の戦士としての決着。

雷撃と炎のぶつかり合いの先に彼らは何かを見る。

「グレンくねえ、グレンってば〜一緒に遊びに行こうよ〜」
ぱたぱたと背後から走り寄ってくる気配と声にグレンは苦笑しながら答える。

「すまない、セシル。今日は魔法兵団に行かなくてはならない」
玄関に向かう足を止めて振り返る。その体にセシルが思いつきり飛びついてくるのが分かったからだ。自分よりも小柄なセシルを受け止めるとそのまま彼女はすっぽりと腕の中に収まった。

「もう〜いじわる、グレンのいじわる!」

拗ねたような声の割に表情は嬉しそうなセシルについてグレンも顔が綻ぶ。彼女の笑顔はいつだって彼にとって元気の素で有り、心の支えでもあった。

若くして魔法兵団戦闘部隊の隊長の職に就いた経験を持つグレンは基本的には多忙なのだ。それでも、一時期に比べれば最近は魔界とのバランスも均衡が取れて、多少は休みの時間も取れるようになっていたが。それは彼と彼女を含む、友人達と共に為し得た事であった。

「行ってくるよ、セシル」

「うん、いつてらっしゃいグレン。美味しい料理作って待っています、お父様」

最後に悪戯つぽい笑顔とウインクで送り出すセシルにグレンは照れと嬉しさから顔を若干紅潮させて手を振って出ていく。そんなグレンの姿がまた彼女の顔に笑顔を満たしていく。

「はあ……あんた達わざとやってるでしょ?」

「え、あはは、えーと居たの、メリッサ」

「居たのじゃない!!!さっきまであんたと話してたでしょうが」
リビングに居た筈のセシルの親友、メリッサ・ベルガモットがいつの間に背後に立っていて、あまつさえ鋭い声でセシルを非難する。

「だって、だってこういうのが出来るのは新婚さんの内だけだって……」

しゅんとなつて、もじもじと呟く。セシルはちらつとメリツサの表情を上目遣いに窺ってみるが、良く分からない。気のせいか少し頬に朱が差したような気がした。

唐突に先程とは違いセシルは相手からぎゅっと抱きしめられた。

そして、物の数秒で離れてリビングへ戻っていくメリツサ。

「はいはい、さっさと先程の話の続き、済ませるわよ?」

メリツサの声が弾んだ事にセシルは気付かない。

「はい!」

「ふふ」

彼女達はどちらも先月結婚したばかり。なので、必要な家具や物を一緒に買いに行く予定でその下調べをしていたのだ。購入する物、そして、必要な物が売っているショップのリストアップがテーブルの上でひらひらと揺れる。

しゅんとなつていたセシルの顔には既に再びの満面の笑顔、一方のメリツサも何故か機嫌の良さそうだとセシルには思えた。

何でかなあ……。

もちろん、原因が自分にある事などセシルの想像の中には一切無かった。

「グレン・ウィツシュハート、只今出動しました」

「うむ、御苦労」

魔法兵団の総司令官であるヴィクトール・ベルガモットの居室に出勤の挨拶を告げる為に訪れたグレン。昨日、グレンには本日の出勤時にヴィクトールの元へ来るようにと連絡があったのだ。緊急時に使う作戦室ではなく普段からヴィクトールが執務等を取り行う居

室の方に足を運んだグレンをヴィクトールはにこやかに迎える。

リュミエール・スペンサー誘拐事件の当時は魔法兵団魔法戦闘部隊の隊長と言う魔法兵団の中でも重要な要職に就いていたのだが、現在グレンはセシルが人間界に来てからは総指令であるヴィクトールの計らいで、とある特別部隊に配置転換していた。

その部隊の任務は街に侵入してくる魔物を撃退しての治安維持と言った所だが、これまたとある事情からあまり出動する事が無かったのだが。

「何か、私に用事が……？」

グレンには総司令官に直接呼ばれるような理由が思い付かない。緊迫した戦時下では無いし、これと言って問題も起こっていないのだ。時刻は正午過ぎ、本日のグレンは遅い勤務番での出勤だったが、この街の時間帯は昼でも外は夜である。窓の外も当然暗かった。

「ふむ……グレンよ、最近の様子はどうか？」

「はっ？」

グレンは思わず聞き返していた。何を聞かれるのか予想出来てはいなかったが、それは完全に彼の想像の範囲外の問いだった。

最近の様子、と言うと自分の所属する特別部隊の事をヴィクトールは良く知っている以上、他の魔法兵団の部隊の事だろうとグレンは当たりを付ける。

今の特別部隊に配属になり元の隊長職を辞した後でも、後任の隊長にアドバイスをしたり部隊の訓練に付き合ったりと、魔法兵団の中で彼がやるべき事は多くあった。

「二度は聞かんど」

「は、近頃は平穏な時間が続いていますので、部隊の規律・統制の引き締めに力を注いでおり……」

グレンにとって、ヴィクトールは育ての親であり、そして彼にとっては魔法使いとしての師匠でもある。時に厳しく、時に優しく彼に接してきたヴィクトールはグレンにとってはいついかなる時でも一番尊敬する人物であるのと同時に畏敬の念も抱く人物である。

ちよつと、強めの口調でのヴィクトールの質問にグレンはつい背筋を正して答えたのだが……。

「ふふつ、すまんすまん今のは冗談だ」

「は、はあ……」

茶目つ気たつぷりに、今度はおどけた口調のヴィクトールに先程と違って完全に毒気を抜かれたような声を出してしまつた。

「今は、比較的穏やかな時間が続いております、確かにそうじゃ。そこまで気を張る事もなからう」

「しかし……」

「しかしも案山子もない。お前もたまにはセシルと遊んでこい」

「は、はあ？」

「明日からの三日間の休暇をとつておいた。二人でどこかへ出かけるもよし、ゆっくりとするもまたよし」

「あ、しかし部隊の方は」

「心配するな、お前達の後任の隊長も育ってきた。そうは思わないか？」

お前達、とはグレンと同じく事件後に攻撃戦闘部隊の隊長を辞して同じ特別部隊に所属するジャック・ベルガモットの事である。

「……分かりました」

グレンはすっかり訳がわからないと言つた表情ではあるものの、内心は当然嬉しかった。セシルと共に過ごす時間と言うなら彼にとつてもこの上ない幸せな時間である。

「失礼します」

ふと、後方から声が聞こえた。グレンは振り向かずともすぐに誰の声か理解する。

「ジャック」

「ああ、グレン」

ジャック・ベルガモットはいつもの静かな雰囲気を漂わせてそこに立っていた。

「では、本日の雑務が有りますので私はこれで。明日からの話、有

「難くお受けいたします」

「そうするが良い」

ヴィクトールは笑ってグレンを見送る。

部屋を出る前に、入口の所に控えていたジャックと軽く声をかわしグレンは出て行った。室内にはジャックとヴィクトールの二人。

「さて、わしはグレンに用事があったが、ジャック、お前はわしに用事が有ると言っておったな」

ジャックは静かにヴィクトールの前まで進むと姿勢を正す。元々口数の少ない男である。無駄な事を口にする事は無かった。

「一つ、お願いがあります総指令官殿」

ジャックにとって、ヴィクトールは義理の父だが、魔法兵団では常にこの呼び名を崩さない。そして、そう言う男である事はヴィクトールも良く知っていた。

「ほつ、聞こうか」

ヴィクトールは頷いていた。

夜のベルガモット邸。メリッサはここ数日のジャックの様子の変化を察していた。

明確に態度がおかしいと言う訳ではない。ただ、何処か纏う雰囲気になんか重さが漂うのだ。元々明るい男でもなかったが、そういう類の物とは違う物を最近は何か背負っていると感じられた。

「浮気？まさか、この人が浮気なんてあり得ない。」

と笑って見たが、気になりだしてみれば気になる物である。メリッサは目の前で静かにココアを啜りながら物思いにふけるジャックに問いかけた。

「浮気？」

「……げほつ、何を言っている」

噓せ方でさえ静かな男である。だが、顔には困惑の表情が有り有りとして浮かんでいた。それを見て、メリッサは数秒前の自分が可笑しくて仕方なかった。

天地がひっくり返ってもあり得ないわね。

しかし、ならば何を思い悩んでいるのだろう。メリッサは少し考え聞いてみる事にした。どうせ自分からは話してはこないだろうとも思ったからだ。

「何か、悩み？」

「分かるのか？」

基本的に二人の会話は短い。だが、それでお互いに意志は驚く程伝わる。セシルには何度も不思議がられた事だった。

「他の人には分からないわ。分かるのは、私だけ、かしらね」

両目を瞑って胸を張り自信満々に言つてのけ、後、片目をそつと開けてジャックの様子を窺う。ジャックははにかんだように微笑んだ。このような顔をするのは、メリッサの前だけだった。そもそも知らない人間の前では喋る事が少ないような男なのだ。人前でメリッサが茶目つ気を出して抱きつこう物なら、仏頂面のまま顔が真っ赤になる。それが面白くて愛おしくてメリッサはたまにわざとやるのだが。

「そうか。心配をかけてすまん」

「私に言える事？」

メリッサは無理に聞き出そうとは思わなかった。聞いてあげられる事なら聞いて力になれば良い。メリッサにも話せない事ならば、黙って傍に居れば良い。

「……グレンと決闘をするつもりだ」

「え？」

メリッサは最初、ジャックが何を言っているのか理解出来なかった。その後、目が合ったジャックが笑ったのが分かった。

「はあ……。全く、この人は。」

肝心な事は言わない。自分の胸の内に秘めて、一人で考えて行動

する。そう、昔から良く知っていた。

「何か考えがあるんでしょう?」

だが、メリッサは誰よりもジャックを信頼していた。

「ああ」

「無理はしないで」

「……ああ」

少し間が空いた事を聞き逃さなかったが、メリッサは言及しなかった。もう何も言わずに、正面に座るジャックの手を握っただけだった。

休日を過ごし、魔法兵団に出勤したグレンを一番に待っていたのはジャックだった。

「良い休日だったか?」

「ああ、二人で買い物に行ってゆっくり過ごしたよ」

「そうか」

二人の目の前では攻撃部隊が調練を行っている。掛け声を耳にしながら、二人は何となく同じ場所に腰かけていた。今しがた、ジャックが一言二言、隊長に声をかけて戻ってきて隣に座ったのだった。

「聞いてくれよ、ジャック。セシルがなあ」

親友の嬉しそうに話す声に耳を傾けながら、ジャックは先日、ヴィクトールとのやり取りを思い出していた。

「一つ、お願いがあります。総司令官殿」

「ほう、聞こうか」

ヴィクトールは声ではそう言ったもののジャックと違って張り詰めるでもなく、優雅に椅子に座ったままだった。一方のジャックの

声にはどこか緊張感が漂う。

「グレンとの決闘を許可……いや、黙認して欲しいのです」

この後、セシルに話した時に彼女は最初呆気にとられていたが、ヴィクトールは違っていた。優しい表情を崩さずに、先を促す。

「何故？」

この反応が想像している通りだったのか、ジャックもまた言葉に緊張感を漂わせたままではあったが驚きはしなかった。

「近頃、いいえ魔界から帰ってきた後のグレンをどう思いますか？」

「見た目は確かに変わった」

「そんな事を聞いている訳じゃありません」

はぐらかす様に、軽く言ったヴィクトールに対して口調はそのままだったが、一歩詰め寄る。冗談のつもりで言ったが、ジャックには通じないと言う事なのだろう。こういう所は昔から一貫しているジャックであった。

「分かっておる、お前の言いたい事は。魔族の魔力も問題なく馴染んでいる。お前の心配しすぎじゃないのか？」

ヴィクトールはため息を吐きながら自分の見解を示した。ジャックはその程度の言葉では退かないだろう事も分かりながら。

「戦って……自らの身で確かめようと言うのだな」

ジャックが頷く。

「ふふ……」

ヴィクトールは思わず笑ってしまった。ジャックが親友であるグレンを心配しているのは嘘ではないだろう。だが、それだけじゃないとヴィクトールは思った。

「まだまだ青いの、ジャック」

「はっ？」

「いや、独り言だ。良かろう、お前の好きにするが良い」

それを聞いて安心したのかジャックは一つ息を吐く。やはり、それなりに緊張していたと言う事なのだろう。

「では、失礼します」

頭を下げ、部屋を去るジャックの後ろ姿を見送り、ヴィクトールは苦笑した。

「自分でも何に突き動かされているのか自覚無し、か」
椅子から立ち上がり、窓から夜空を見上げる。

「そろそろ、父親の顔になつてもらわんと困るんだがなあ……」
呟いて、自分もそんな風だったのか振り返つて、一人今度は違う意味で苦笑いしたヴィクトールだった。

「おい、ジャック聞いているのか、ジャック！」

グレンの声はずっと聞こえていた。ジャックは頷く。

「お前と姫ののろけ話を聞く身にもなつてみる」

『姫』とはグレンとセシルをからかう時のお決まりのセリフだった。もつともセシルにはそんなからかいの言葉は一切通用しないが。

「おい、メリッサと人前で」

「あれはメリッサが勝手にやってるだけだ。俺は知らん」

ジャックはぶすつと横を向く。

「くっ、こいつは……」

思わず握りこぶしを作りそうになるグレンは顔を背けたジャックが僅かに嬉しそうな表情をしているとは、夢にも思わないのだろう。

「グレン」

「何だ」

何でもないように、いつもの調子でジャックはグレンに話しかけた。

「その内、お前に良い物が届く。楽しみにしている」

「え？お、おい」

ジャックは立ち上がり、グレンに手を振り歩いて行ってしまった。グレンはその場に残され愚痴った。

「まだ半分しか話してないぞ」

ジャックは既に遠い。

ジャックとグレンが魔法兵団で出会って一週間後。町はずれにある古びた闘技場。そこでジャックは目を瞑って立っていた。今日の空は、雲が多く星が見えない。目を瞑っていても、何となくそう思った。

人の近づいてくる気配を感じた。それでもまだ目を開けない。そして、その男が目の前に立つ事が分かり、ゆっくりと目を開ける。闘技場一面を照らす灯が眩しかった。そして、その灯りの中一人の男が立っている。

グレン・ウィッシュハート。幼き頃から兄弟のようにして共に育った自分の親友にして好敵手。

「おい、どういう事だ、これは」

グレンは懐から手紙を取り出し二人の間に放り投げる。その声には困惑と怒気が含まれている。素直な男なのだ。

「どうもこうもない、そこに書かれている通りだ」

「ふざけてるのか、俺とお前が決闘だと？」

「ふざけてなどいない。ヴィクトール総指令にも許可を貰っている。魔法兵団には昔から互いに切磋琢磨して己を磨く手段の一つとして『決闘』が認められていた。それには、上官の承諾が必要でそれぞれ一部隊の隊長まで務めた二人の上官とは即ち魔法兵団総指令のヴィクトールに他ならない。

「馬鹿な、そんな大昔の決闘システムなど……」

「逃げるのか、グレン」

挑発するようにジャックの口元が笑みの形に変わる。

「ジャック……」

「グレン、お前の甘さを今ここで断ち切る」

ジャックの目に宿る闘気は澄み切っていた。迷いが、ない。

「待て、ジャック、何故俺とお前が」

「くどい」

ジャックはグレンに構えろと言わんばかりにゆっくりと構えを取る。

誰も居ない闘技場。そして、二人。

「いくぞ」

グレンは舌打ちの後構え、直後後ろに飛び退く事になった。

速い。思考と同時に、体が動いた。グレンが今居た場所にジャック

の拳が撃ち込まれていた。一瞬で10歩もの距離を零にする速さ。

ジャックは再び飛びかかろうとして、止めた。

グレンの前には炎の柱が。そして、口には詠唱の動きが。

「ふっ……」

今、迂闊に飛び込めば動きを制限された上で真の魔力すら従えたグレンの弩級の火力を叩きこまれる事になる。だが……。

「やはり甘い、今のお前は」

ぐっと、ジャックの姿勢が低くなる。そして、足元の埃が不自然に巻き上がる動きを見せた。

互いに幼い頃より知った身であり、ヴィクトールの兄弟弟子でもある。それぞれの戦法も、得意とする魔法も知っていた。そう、少なくともグレンはそう思っていた。

「お前が、その力を手に入れたように、俺も強くなる。今日より、明日。明日より、未来」

ジャックは特に大きな声でそう言った訳ではない。むしろ呟くように言い、冷静な声だった。だが、グレンにはその声はつきりとそして大きく聞こえたような気がした。

「お前相手に、手加減等出来る筈もない」

それは、こう言ったのだ。切り札は最初から切る、と。

ぱちり。グレンの耳が最初に捕えたのはそういう音だった。

ぱち、ぱち。次の音で、グレンは理解した。その理解があと一瞬

遅ければ、そして、グレンが並みの魔法使いならば既に意識はない。今度は後ろではない、横跳びに態勢を崩しながら転げ飛んだ。次の瞬間、ジャックはグレンが居た場所より後方に地を突き破り突撃していた。だが、グレンと違って態勢を崩していない。

グレンの方向へ振り向き様、拳を掲げ、地に落とす。轟音と共に割れる大地は一瞬でグレンを飲みこもうと迫る。

グレンの目の前で地割れは、やはり地から噴き出たような炎に阻まれ止まった。

まだだっ！

グレンは心中、叫ぶ。背後。来る。

今度はグレンが振り向き様、杖で応戦したが、ジャックの拳に杖は弾かれ宙を舞う。

次に襲いくる蹴りを、グレンはいなし、足元を崩そうと逆に蹴りを放った。

だが、ジャックはかわす。その大柄な体からは信じられない俊敏さで真上に飛んでかわしたのだ。

最も、それはグレンにとっては予想通りだった。目の前に居る男のその見た目とは裏腹な軽快な身のこなしは、飽きるほどこの目に焼き付いている。

一旦距離を置く。その為に放った蹴り。これでジャックが飛んでいる隙に、何らかの行動で距離を取るきっかけにしたかった。

それすらジャックは許さない。

また、耳に空気が弾けるような音が聞こえた。

危険を全身で感じて身を擦ったが、今度は完全に回避出来ない。受身を取るような態勢で吹き飛ばされるが、勢いを殺しきれずに、受けた右腕には鈍痛。後に、数メートルを飛び叩きつけられた全身に衝撃が走る。

そのまま、転がりながら態勢を整えると構えなおした。それで、ようやくジャックとの距離が開く。

息は既に荒い。斜め上から蹴られたのだ。

驚く事に空中で瞬時に、方向を変えての蹴り一閃だった。

「ベルガモットの……雷光を格闘術に組み込んだか」

恐るべき事であるのは、既にたった今身をもって知った。

「そうだ」

返答は短い。

本来、ベルガモット家は雷系の魔法を得意とする者が多かった。

格闘術を得意とするジャックがそれを自分の戦法に組み合わせて昇華させたと言う事である。正式にジャック・ベルガモットとなってそれ程の月日は経過していない。元々、その習得を目指して訓練をしていたのだろう。名実共に『ジャック・ベルガモット』として、その新たな格闘術を力としたと言う事だった。

グレンは元来魔法使いとしての戦闘スタイルは魔法を中心として闘うタイプであり、ジャックとは違う。どちらかと言うとジャックのような格闘を得意とする者との相性は良くない。それでも、グレンも当然一通りの武術は身に付けていたし、相手が並みの者なら全く問題にしないだろう。

相手は、あのジャックである。事、格闘術に関しては既に右に出る者も僅かと言うレベルだった。

「グレン、お前は優しい。そして、それは甘さへと繋がる」

「何？」

「あの時何故、一人で戦った」

ジャックの言葉に束の間鋭さと熱さが滲み出た。

「俺は大切な友を失う所だった」

「ジャック……」

「そして、今、俺にはメリッサが居る。彼女の腹には子も居る」

冷静さを取り戻した声は静かに語った。あの時、が何時なのかグレンには良く分かった。共に魔界へ送われた少女を助けに行った時の事。そして、グレンがセシルと出会った時の事。

あれから長い時が経ったような気分グレンは襲われたが、実際にはそう遠い過去の話では無い。

ジャックが未だにその事を後悔していた事をグレンは知らなかった。今知り、僅かに唇を噛む。

自分が逆の立場でも憤慨しただろう。友を一人残していかなければならない事。仕方なかったとは言え、共に闘えなかった事を。

「グレン」

声が不思議な響きを持った。グレンにはそう感じられた。

「何故、セシルを連れてきた」

「何……？」

意識せずに問い返すように呟く。

「何故、セシルをこちらの世界に連れてきた。それが何を招くのか考えたのか、グレン？」

「……それを本気で俺に言っているのかジャック？」

グレンの声が低くなる。

「無論だ」

「ジャック！」

怒気を孕んだグレンの声はジャックの声とは比べ物にならない位大きく響いた。

「言つて良い事と、悪い事がある。今の言葉は取り消せ！」

ジャックの口の端に笑みが浮かんだ。冷笑だとグレンは思った。

「取り消さない、と言ったら」

言葉が終わると同時にグレンの掌が宙を向いた。目の前に幾重もの魔法陣が展開して、炎弾の嵐がジャックの居た辺り一帯を轟音と共に焼きつくす。だが、爆発の合間を縫ってジャックは全てをかわず。それが分かっていたかのように、グレンは躊躇わず前へと出ていた。

ジャックが爆炎の中にグレンの姿を認めるよりも早く、グレンは炎に乗せた拳をジャックに叩きこんだ。

宙を舞い、倒れたジャックはゆっくりと立ち上がる。炎は既に消え、白煙だけがまだたちこめている。

「来い、グレン」

その言葉が再びの合図だった。グレンは走りながら炎の矢を無数に放つ。幾らスピードがあろうと人の大きさでかわせない程の密度で放つ矢を拳に魔力を宿したジャックは目にも止まらぬスピードで叩き落としていく。

しかし、ジャックは僅かに舌打ちをして距離を取ろうと横に逃れようと体を向けた。

「っ!?!」

一歩踏み出す前に異変に気付く、自分の周りを囲むように小さな魔法陣が幾重にも張り巡らされている。何時の間に、そう思った瞬間にその魔法陣から煙が上がった。

一つでは無いのだ。それは煙幕として無数の魔法陣から噴出し、辺り一帯の視界を完全に奪うった。ジャックは気配からグレンの来る方向を探そうとして気付く、魔力が追えない。

「気配遮断付きだ」

声と共に煙を突き破った炎。一瞬にしてジャックの全身を包み燃え広がる。

ジャックは飛び退り自らの魔力で、その炎を消し飛ばす。グレンにもジャックにも言える事だが、彼ら魔法使いは強力な魔法を使えば使える程、強者であればある程その体を持つ抗魔力も強い。なので、魔力による故意的な自然現象、今ならばグレンの放つ炎が該当するが、それ自体により普通の人間のように焼け死ぬ事はあまり考えられない。

だが、彼らが抱える魔力は当然無限ではない。消費すれば、体に蓄えられた生命エネルギーとしての魔力は減少していく、更に突き詰めるならば限界を越えて無理をすればそのまま命を落とす事にも成りかねない。

「くう……」

ジャックは思わず声を漏らした。相変わらず強力な魔法だった。いや、前よりも確実に威力を増している。そのグレンの魔力を振りほどくのに、一気に自分の体力を持っていかれた事が分かる。

これが、魔族の魔力故なのか、ただ単にグレンの実力が上がったのか。

ジャックは自らの体に集中する。そして、魔力により体に雷撃が纏っていく事を確かめた。

地を蹴る。瞬間の加速。風切り音が耳を打った。

グレンの姿が、視界に入ったのと同時に拳を振るった。手応えはない。己が何を突いたのかジャックには分かった。そして、焦りからの軽率な攻撃を悔いた。

塵気楼。炎による温度差をコントロールする事で、生み出した幻。畏だ。そう思った。もう遅いとも。

空撃で僅かに出来た隙。体の自由と意識を奪われた一瞬。認識のずれた、その向こうに最初から居たグレンと目線が刹那、合った。詠唱が終わる前に炎の壁が彼の姿を視界から消した。横にも後ろにも。円周上に、炎がジャックの周囲に展開して空へと瞬く間に伸びた。

何が起こったか分からなかった。

グレンは体を貫いた衝撃から、崩れ落ちそうになる膝で必死に踏ん張った。

体内の魔力循環が完全に掻き乱されている。炎を操ろうとして、右腕からスパークするように電気を帯びた火の粉が散った。

グレンの使う攻撃魔法の中でも威力としては最上級の技が決まったのだ。密度の濃い炎の壁で相手の動きを封じてそのまま押し包み、燃え散らかす。決まった筈だった。

技が決まるか否かの瞬間に炎の壁の一点が雷撃で食い破られて、そのまま自分の周囲を突きぬけて行った。もちろん、グレンの体も容赦なく。

兎に角、痺れる体を引きずりながら炎弾を放ち、ジャックから距

離を取ろうとするも、ジャックは追いつがってくる。彼にしてみれば、近距離に持ち込んで一気に勝負を付けたいのだろう。

「ぐっ」

体の痛みに僅かに動きが緩んだ。その隙にジャックは雷撃の加速で、瞬時に距離を縮めた。

炎の壁を展開するも、拳に魔力を込めたジャックの一撃に幕を降ろされるように、呆気なく引き裂かれた。一発、二発と体に容赦なく拳が叩きこまれ吹き飛ばされた。

受身を取りながら態勢を立て直そうと間髪入れずに今度は二重の炎の壁で距離を取った。

息を整えようとしながら、既にそれは叶わない。

魔力が底を尽きかけている。連続で使った強力な魔法と直接体に刻まれたダメージがグレンの魔力を奪っていた。

ひゅっ、と短い音、それが何なのか理解してグレンは歯を食いしばり上空に向けて炎を展開する。今度は壁などではなく、彼の魔力が十分に宿った攻撃用の炎、だが、多少のダメージはお構いなしにジャックは突っ込んできた。咄嗟に避けるも、ジャックの拳はそのまま地を砕き、衝撃と共にグレンを木の葉のように軽く撥ねた。

踏み止まる。体の中に熱い炎が燃えた。色にすればそれは、赤黒い炎。

循環する魔力が暴れそうになる感覚をグレンは知っていた。それは、かつて魔界で彼女に命を救われた時の事。あの時以降、こうはならなかった。確かに魔族の魔力である『真の魔力』を従えてはいたが、あれ以降グレンが追いつめられる程魔力を酷使した事が無かったからなのか。

ジャックの動きが止まる。そのまま追い打ちをかけてくる物だと思っただが、どうやらその様子はないようだ。

グレンは体の奥で爆ぜる何かを、確かに感じた。

ジャックはグレンに起きた異変を察した。

いや、これまで抑えていた物が滲み出てきたと言う所か。心中で当たりをつけ、予想していた事態なのに動揺する心を隠すように舌打ちをする。

あの事件以降、グレンが使う魔力の質は変わっていた。それが、セシルから分け与えられ彼の命を救った魔族が持つ魔力である事は分かっていたが、グレン自体は見た目以外には何も変わっていないと思われていた。それが彼の持つ魔法使いとしての圧倒的な資質が可能にしたと言うのが周囲の意見だったのだ。

グレンはその事について特に多くは語らなかつた。そして、ジャックは、そうは思っていなかつた。僅かに感じる違和感。幼い頃から、彼と共に育つて切磋琢磨し合ってきたジャックには確かに感じる物があつたのだ。

僅かな魔力の揺らぎ、それは今にしてもそうだ。グレン自身に自覚があるのかは分からないが、急に魔力が切れた感が明らかだった。確かに、彼の使う魔法は強力であるが故に、消費する魔力も普通の魔法使いとは比べ物にならないが、それを十分に使いこなす器がグレンには確かにある。

それが、今は簡単に言うならバランスが悪い、と言つた所だろう。だからと言つて単純に真の魔力とやらが、グレンを弱体化させたとはジャックは欠片も思えなかつた。それは言葉に表せる物ではなく、魔界から帰つてきたグレンを見た時に何か直感のような物で悟つていたので。得体の知れない何か、とも言えるのかもしれない。このままでは、自分はグレンに遠く及ばなくなる。そう思つて、それからも必死に鍛錬で力を付けてきた。

そして、今、グレンと真剣に近い決闘でジャックは確かに圧していた。

ここからか。

驚きは無かつた。やはり、と言う思いがあるだけだ。

だが、動揺した。それは、今、目の前に居るグレンから感じられる魔力に心が魅かれたからだ。理屈では無かった。ただ何となく魅かされている。言葉にするなら、そうとしか言いようがない。

ヴィクトールの何時かの言葉を思い出す。

『真の魔力は人を魅了する力がある』

確かにそうだ。言うなれば、人はそれを本能的に求めているのかもしれない。

ぐつと体に入力を入れ直す。覚悟は出来ていた。

ジャックが動き出す前に高速の詠唱を唱えながら、グレンは周囲に二つ三つと魔法陣を展開する。

四つ目の魔法陣が宙空に浮いた時だった。ジャックの拳から放たれる目にも止まらぬ雷撃が魔法陣を打ちぬこうと迫った。

グレンは一言呟く。四つ、それぞれの魔法陣から一斉に放たれた炎の帯は一つに纏まり、グレンが魔法陣目掛けて放った雷撃の全てを飲みこみ、さらにジャックに迫った。

その一撃をジャックはかわしたが、極太い蛇のようになった炎は的を外したからと言って消える訳でもなく、のたうつように向きを変え、そのまま再びジャック目掛けて動き出した。

それだけではない。次に宙空に出た五つ目の魔法陣から、網の目の如く無数の小さな火球がジャックを襲った。蛇を避ければ、礫を良ければ、蛇。それぞれに体を食い破られるだろう事は見た目から察せられる威力からも想像に難くない。

ジャックは一息吸った。魔力を瞬間的に足の方へと集中させる。

左足を軸に、そのまま思いつきり弧を描くように右足を高く蹴り上げ、回転させた。魔力の奔流、そして単純な風圧、それは火球をほぼ打ち落として、そしてその勢いのままに今度は両足を踏ん張り、蛇を正面から乾坤一擲の正拳突きで迎撃した。

そのジャックの一撃の威力は凄まじく、周囲の空気を振るわせ、炎の塊である蛇を一撃で霧散させる程の威力だった。

そして、ジャックは目を疑う。散った炎の蛇の中から出てきたのはとある魔法陣。その魔法陣をジャックは知っていた。

転送、魔法陣……！

ジャックの体は渾身の力を込めた一撃の所為で、僅かな間だけ動かない。

「巨石をも穿つ拳、『ロックショット』。ジャック、お前ならあの蛇を正面から打ち碎けると信じていたよ」

声。そして、魔法陣から出てくる腕。後、グレンの嬉しそうな笑み。

「うおおおおお」

ジャックの叫びよりも早く、グレンは短く呟き両手をジャックの正中へと置いた。

自分の目の前、零距离に居るグレンへと拳を振り下ろすジャックの腕は胸に奔った熱さに阻まれて届かず、その体は紅い、赤よりも紅い炎に包まれ飛んだ。

がくがく揺れる膝を必死で支えながらジャックは何とか立ちあがった。信じられない。やはり。二つの思いが交差する。転送魔法陣を個人で展開して、更にその後の一撃に込められた圧倒的な魔力。先程まで消耗していた人間に出来る芸当とは思えなかった。だが、そういう事なのだろう。

今のグレンに流れる魔力は文字通り質と量が違うのだ。そして、グレンはそれを無意識の中で封じていた感がある。それは、彼が魔力を持て余していたからでは、断じて無い。

その理由は、彼自身その魔力の持つ力を知らずの内に理解していたからだ。グレンの元々持つ魔法使いとしての器と、魔族の真の魔力。その二つが合わさった時の強大さは、恐ろしい物でもある。

だが、それを恐れて秘める事を、ジャックは甘えと断じたのだ。

「まだだっ！」

奥歯を噛みしめ、体の奥底に残る力を引きずりだす。

「引け！ジャック、死ぬぞ！」

「引かん！お前なら、俺が引かない事を分かっているはずだ」

「ジャック……」

「知りたくはないか、自分の限界の先を」

グレンは彼の瞳に燃える炎に束の間、心が揺り動かされる。

「ふふ、そういう男だな、お前は」

「お前もだ、グレン」

言葉共にジャックは地を蹴った。

グレンは詠唱と共に両手を上げる。そして、グレンの周囲の空間が歪んでいく。

ジャックは思わず、嬉しいと感じた。これ程の男と死力を尽くして戦えているのだ。彼の本来の目的はグレンの真の力を呼び醒ます事だった。その目的はとうに達しているが、自分自身の戦士としての衝動を抑えられなかった。もうこの先、グレンとこれ程の真剣に戦える機会などないかもしれない。

再び義父の言葉が蘇る。あれは彼に、そしてグレンに向けた師匠としての言葉だったのかもしれない。

『まだまだ青いな、ジャック』

グレンの掌にあり得ない程の魔力が集まっているのが分かった。それでも、真つすぐとグレンへ向けて走る。残り少ない力を拳の一点に極限まで集中させる。それでグレンの炎を突きぬけるつもりだった。針で巨大な岩石を貫き通すかのような無謀。だが、ジャックは出来ないとは思わなかった。

吠える。グレンが腕を振り、魔力を解放した。業火の炎がジャックの身を包む。

拮抗。あと数歩の距離、グレンの荒れ狂う魔炎の中でジャックとグレンは一点を支えに押し合う形となった。

どちらかが消し飛んでもおかしくない。

渾身の力で、一歩進んだ。熱くて苦しいが、ジャックはその先に

光を見た。

二人の体の前に、魔力が消し飛んだ。

この押し合いは、ジャックの勝ちだった。一点に集中させたジャックと炎を展開させたグレン。

遂に、グレンの魔力を枯渇させたジャックだったが、彼にもまた力は残って居ない。

「グレン、見事だ」

「ジャック……」

ジャックは笑みを浮かべた。

「その力を抑えようとは、するな。お前なら制御出来る」
数歩の距離で対峙する二人。

「さっきの言葉は取り消そう、グレン」

「ジャックお前」

先の言葉。セシルの事だとグレンは思った。

「もう戦う理由は無くなったのだが……すまん、グレン。俺は、
どうやらお前と決着を付けたいらしい」

「言っな、俺もだ」

今度は声を出して笑い合った。

これまでも手合わせしてきた事はあるが、ここまで真剣に拳を交えたのは初めてだった。

「次に戦う時が有れば」

「次は無い。あつてはならない。この戦いは俺の我儘だった」

ジャックは僅かに笑いながら、グレンの言葉を遮った。

「ジャック……」

「俺には守りたい奴が居る。いや、奴ら、になったのか。お前もだ
るっ?」

「ああ」

「この先、この拳は守る為に振るう。例え俺がどうなるうと、守るぶつきらばうな言い方だが、グレンにはいつものジャックにしか見えなかった。それが嬉しかった。」

「そうだな、ジャック。俺もこの先に何があったとしても二人を守る。この力も全てはその為に、使う」

「ふっ、それで良い」

笑い合った。

次で最後だ。

言葉にする必要は無かった。

どちらともなく、動いた。馳せ違う。

一発ずつ、互いに拳が入った。どちらも魔力が残っていないのなら、残るのはその拳だけだ。

背中合せ。何度もこうやって共に戦ってきた。

吼えた。振り向き様互いの拳が今一度交差し、殴り飛ばした。

二人とも数歩よろめき、満足そうに笑った。

「引き分け、か」

「だな」

同時に仰向けに倒れる。何時の間にか澄み渡った夜空に、星が見えた。

遠くから声が聞こえた。メリッサの声とセシルの声だ。迎えに来たのだろう。

仰向けに倒れたまま、ジャックは気まずそうに呟く。

「メリッサに怒られる体力を残していなかった」

「はは、そいつはご愁傷様だな」

「何を言っている。お前、他人事だと思っているだろう?」

ジャックは可笑しそうに言った。

「セシル姫はボロボロのお前を見たら泣きつく。絶対に」
「うぐ」

グレンは返す言葉に詰まった。普段なら可愛いじゃれつきだが、正直今の身体では耐えられる自信がグレンには無かった。

「ちよつとは容赦しろよな、ジャック」

「どの口が言っている、グレン」

この後、二人は同時にため息を吐いていた。

(後書き)

マジカルハロウィン妄想と言う名のSS第四弾！

一連の設定は、自分が勝手に考えてる脳内妄想に基づきますのでそこから辺はご了承下さい(笑)

親世代を妄想するのが楽しすぎる！(笑)

今回、親世代4人にはそれぞれの方向からアプローチして動かしてみました。

男二人は思いつきり自分好きな展開にしましたが、4人の中でも特にお気に入りなのがメリッサさん。セシルが基本的にアリス+なのに対してメリッサさんはローズとは違う方向から考えたらこう動いてくれました。

コンセプトは10年前の事件が起きずに成長したローズ、かな。まあ、素直になれないローズも可愛いのですが、素直になるところなりますって事で。

お粗末の文章に付き合っていたいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7463y/>

SS4_紅蓮の絆

2011年11月22日03時10分発行